

## 思い出すこと

綾 目 広 治

古い手帳を見ると、武田ミキ先生に初めてお会いしたのは、一九八四年一月二十三日である。この時にはすでに、私は広島文教女子大学にその年の四月から勤めることが決まっていて、学長の武田ミキ先生のところへ御挨拶に伺ったのである。武田ミキ先生のことについては、それまでに何人かの方からお話を聞いていた。先生は、女子教育に本当の意味で情熱を持っていらつしやっていて、お体は必ずしも強くないが、気力で頑張っていらつしやる方だということ、どの方もおっしゃった。私は、「女傑なんだな」とは思ったものの、いったいどんなふうな女傑なのだろうか、そのイメージはほんやりしたまま、武田ミキ先生にお会いしたのである。

横山先生に連れられて学長室に入った時、私は、ちょっと驚いた。そこには、小柄な（といっても、武田ミキ先生の世代の中では、先生はおそらく大柄なほうでいらつしやったと思われる）、そして楽しい昔話でも話してくださいそうな、やさしそうな高齢の女性がいらつしやったからである。「この方が、あの武田ミキ先生！」。

その時のお話の内容は、はっきりとは覚えていない。ただ、大学は学問の場である以上に教育の場である、ということ、武田ミキ先生が強調されたことだけは覚えている。そして、先生のお話を伺ううちに、「なるほど、この

一、大学人としてともに生きて

方はただのおばあさんではないな。筋金入りだな。人間をたくさん見てきているな。」と思ったことを覚えている。「人間をたくさん見てきている」と思ったのは、初対面の相手（この場合は私だが）と話をされる時の先生の雰囲気から、不遜にもそのように感じとったのであろう。

しかし、この時はまだ、武田ミキ先生の、学長としての実力がわかっていただけではなかった。先生は、いわば大学のシンボリック的存在であり、精神的支柱ではあるが、重要な事柄は周囲の方々が決裁しているのだろうと思っていた。やがて、その臆断が間違いであることがわかった。

たしかに、先生は大学の精神的支柱ではあるが、それとともに大学のまさに全体の実務も執っていらつしやったのである。印象深く覚えているのは、ゼミや会議で遅くなり、もう辺りが暗くなって、「さあ、帰ろうか」と思つて学長室の前を通ると、いつも学長室から明かりがもれていただけである。同僚の先生方や事務の方から聞いたことであるが、武田ミキ先生は細かな書類にまで目を通されていたようである。先生は、単に精神訓を語るだけの学長ではなかったのである。さらに、思い出されるのは、学生の問題で先生の御判断を仰がなければならなかった際の、先生のテキパキとした御指示である。その時は、先生の、教育者としての経験の厚さに感心したことを覚えていいる。

このようにして、私の中の武田ミキ先生像は、勤めだしてから数か月間に当初のものから変わっていった。それは、実像に近付いたということであるが、しかし、それは学長としての実像であつて、一人の人間としての実像ではない。私の在職期間がわずか三年であつたためということもあつて、一個人としての先生の聲咳に接することはできなかった。しかし、教授会などの会議の席で、時折、軽く冗談めいたことをおっしゃつて、ニコッと微笑ま

れることがあり、その時には先生の素顔をほんのわずかだが拝見したように思った。実にいいお顔であった。失礼を承知で言うのだが、可愛いお顔であった。今の大学に勤めるようになって、卒業生に贈るメッセージを求められたことがあり、私は、「いい顔をしたおばさんに、そして、いい顔をしたおばあさんになって下さい。そんな人生を歩んで下さい。」と卒業アルバムに書いたのだが、その時の私の頭の中には武田ミキ先生の笑顔があった。

武田ミキ先生は、教育者としての人生を全うされた。もちろん、先生の教育理念が今の社会にそのまま有効かどうかは論議のあるところであろう。しかし、教育にたいする先生の情熱は、今の社会で教育に携わる者にとっても、学び、受け継がなければならないものである。武田ミキ先生がよくおっしゃっていた、「大学人は、研究者であるとともに教育者である。」という言葉は、大学理念が曖昧になってきている現代こそ、肝に銘じなければならぬ言葉であろう。